

○宮崎日日新聞社賞（中央大会・法務事務次官賞）

「同じ空の下で」

宮崎第一中学校 二年 仲本 愛

君も見ているだろうか、この、青い空を。君も感じているだろうか、この夏色の風を。私は、この夏、貴重な体験をすることができた。それは、「決まったよ。」という担任の先生の一言から始まったのだ。外から自分の住む日本を見てみたい。自分の中の何かが変わるかもしれないという安易な思いだけで、県の事業である「アンニョンハセヨ、少女国際交流事業」に申し込んでみたのだ。その決定通知を目の前にして、正直心がゆれ始めていた。なぜなら、軽い気持ちで、参加申し込みをしたものの、実は、韓国という国にあまり良いイメージを抱いていなかったからだ。ニュースで見た韓国のデモの様子は激しく、恐いとさえ思っていたのだ。そんな私の気持ちとは反対に、書類の提出、説明会と韓国行きが具体化していった。「大丈夫かな、やっぱりやめようかな。」という私の心の声に気づいたかのように、父が「自分の目で見ることには大事、知らないことほど怖いものはない。」と言って背中を押してくれたのだ。

初めて見る外国の景色。降り立ったインチョン国際空港では、たくさんの外国人が行き交い、聞こえてくる言葉も英語、韓国語はもちろん、フランス語やタガログ語など、まるで地球儀の真ん中に立ち、ぐるぐると回っているかのように、世界を体じゅうで感じる事ができた。初めて食べた韓国での料理。日本とは、全く違う味に少しとまどいながらも、韓国の習慣を聞きながら味わうことができた。そして、さらに私は、韓国と北朝鮮の国境を見ることもできた。広大な土地が広がるなかフェンスとフェンスで分断された土地、いや土地だけではない。分断された家族もいることを知り、胸が見えない何かでしめつけられたようになり、苦しくなってしまった。ニュースや新聞では知り得なかった事実を目の当りにし、私の中の何かが変わろうとしていた。

韓国滞在四日目からは、いよいよホームステイ。私は、翻訳機はできるだけ使わず自分の持つ表現力でとにかく伝えてみようとして心に決めていた。そんな私の思いに応えるかのようにホームステイ先の家族も身振り手振りで伝えてくださった。私は自然と家族の一員として溶け込むことができたのだ。国立中央博物館や戦争記念館にも連れていってもらった。今まで、知らなかった、いや知ろうとしなかった韓国と日本の歴史がそこにあった。日本から見ると韓国、韓国から見ると日本。互いに立場は違っても人を愛する気持ちに変わりはないこと、記念館の方が語って下さった。私は今まで、自分がどれだけ狭い視野で物事を見てきたかをあらためて感じる時間だった。その日の夜、もう一つ出来事があった。ホームステイ先の私と同じ年の女の子と話をしていた時のことだ。突然、深刻な顔をして、私に言ったのだ。「日本に対して、私は嫌悪感を持っていた。でも、今回この国際交流に参加して、愛に出会って、そんな思いはまちがいだと気付いた。今まで、ごめんなさい。」と。私

は、返す言葉がなかった。なぜなら、私自身も同じ思いを持って、韓国に来ていたからだ。そのことを、見透かされたように思えたのだ。さらに、彼女は、自分の思いを素直に打ち明け、私に何もしていないのに、謝ることまでもしてくれたのだ。そんな彼女の姿はさすがしく立派で、私はただただ彼女の顔を見つめてうなずくことしかできなかった。

私は、ベッドの中で考えた。私にとって、今まで偏見、差別は関わりのないものだと思っていた。しかし、それは間違いだということを彼女から教えられたのだ。自分の思いだけで判断し、近寄ろうともしない、知ろうともしない、そのことが、私自身が最もいやだと思っている、「偏見や差別」につながっていることに今さらながら気づいたのだ。私の心の中にも、いとも簡単に住みついてしまっていた韓国に対する偏見に気付いた時、そんな自分に対しての怒りよりも、恐ろしさを感じてしまった。「偏見や差別」は、特別な感情ではなく、無知や無理解と常に隣合わせにあるものだと思う。出発前に父が言った「知らないことほど怖いものはない」という言葉が、彼女の「今までごめんなさい。」という言葉が重なり、ぐるぐると頭の中をかけ巡っていた。

韓国に行く前と今とでは、見上げる空の色が違って見える。その空を見上げる時、私を大きく変えてくれた韓国の友達のことを思うようになったからだ。言葉、文化、肌の色が違って同じものに感動し、家族を愛し、友を大切に思う。そんな心は遠くにいてもつながっているのだ。そんな思いに直接触れ、知ることができた十四歳の夏を私は決して忘れることはないだろう。そして、これからもこの空を見上げるたびに、「知ること」の大切さを心に刻みながら、明日への扉を開いていこうと私は思う。